鳥葬

倉坂葉子

「お、――」
朝刊を読んでいた浩三がふと、つぶやいた。
「なに？」
とみな子。野菜を刻んでいた手を止める。
「なあに？　いったい――」
包丁を置いてエプロンで手を拭きながら、食卓についている夫のそばへきて、肩越しに新聞を覗き込む。
「やっぱりなあ、――去年の同窓会のときは元気にみえたがなあ」
夫が指す新聞の「おくやみ」欄。旧制中学で同期だったK氏の、氏名、住所、年齢、死亡月日が載っている。
夫婦お互いに定年で職場をリタイア後も、浩三とK氏は頻繁に会い、親しい交友が続いていたのをみな子も知っている。肩を落とした浩三は食欲もなくなったらしく、好物の味噌汁のお代わりもしない。
「いきなりだぜ、ひどいよ。入院したなんてことも聞いてないし――」
「事故かしら？　たとえば、夜出歩いたりしていて、クルマに撥ねられる高齢者が多いって、昨日のニュースでもいってたわよ」
「それはないよ、あいつは用心深いんだ。そんなことは百も知っとるさ。原因が分からんとこっちも――」
口をつむぐ。
二人は老人という言葉がきらいだ。「××老人憩いの家」などという看板をみると、わざわざ「老人」を入れなくてもいいと思う。若者も高齢者も同じ人間感覚で、ざっくばらんに憩える家があってもいいのに、と思ってしまう。しかし、K氏の突然の死は、八十歳を越えた二人にとってはまさに他人事ではない。明日は我が身という感覚は常にある。
朝食後、浩三は電話をかけ始めた。別の友人のところらしい。
「バカだなあ、屋根にのぼって松の木の剪定をしていて、足を滑らせて下に落ちたそうだ。

外傷性クモ膜下出血だってさ」
「あ、その話、私も友だちから聞いたことがあるわ。とにかく高齢者が高いところへ登っちゃダメってことね」
「葬式は明日なんだ、喪服、すぐ出るかなあ」
「行くの？」
みな子は気が進まない。
八十歳になって、二人ともほぼ四十年間乗ったクルマの免許を自主返納したばかりである。近回りは夫は自転車、みな子は最近よくみる高齢者向き三輪車での買出し、というスタイルが定着してきた。昨今の世界同時大不況下でも、お陰で二人とも共済年金をもらっているので、明日の食事にも困るようなことはない。が、食料品をはじめ生活日用品などが一様に値上がりし、年金以外に収入の見込めない二人は、できるだけ散財はしたくない。だからみな子は買い出しも午後の遅い時間帯を選ぶ。すると、ほとんどの食材が半額とか、二、三割値引きされていて助かる。
K氏の自宅近くの葬儀場は、ここからはかなり遠いから、浩三は自転車を止めタクシーを選ぶだろう。すると二、三千円はかかるはずだ。
「Kが死んだんだぜ、行かんわけにはいかんだろ」
みな子は黙って洋服ダンスを調べ、夫の正装用の黒のスーツ上下を取り出し、今晩中に風とおしをしておく準備を始めた。
「あなた、香典はおいくら包むの？」
「いつか、加奈子の私大の入学金が足りなくて、Kに頼んでさっとその場で全額貸してくれたことがあっただろ、恩になっとるんだ、それに相応にせんと——」
長女の真佐子も、次女の加奈子も東京の私大に進学した。三人目を妊娠したとき、みな子は中絶を考えた。しかし、当時生きていた実母のリツが、女児ばかりでは寂しい、せっかくだから三人目が男児かもしれないのだからと、しきりに中絶に反対したいきさつがある。友人のなかには二人とも男児だったり女児だったり、という例もある。迷ったがみな子自身ももしや？　という思いを捨てきれず、結局、第三子は男児として生まれてきた。彼が高校を終え、大学は経済的にも国立を選ばせたが、一度目は失敗し、一年まるまる浪人して、その街の予備校に通い、二度目にやっと合格した。
加奈子の私大の入学金を納めるころ、長女の真佐子の東京生活でのさまざまな出費の上、運悪く浩三が自転車で通勤中、雪道でスリップ転倒し、靭帯切断、入院という出来事があり、年度中なのでボーナスもなく、思い切ってKに借金するしかなかった。Kは快くその場で全額貸してくれ、助かった思い出がある。
結局、香典は五万円をはずんだ。大事をとって夫はタクシーでかけた。
浩三たちは同窓会をしても、三分の二は鬼籍に入っているという。みな子の同期生も同窓会に出てくる顔ぶれが固定してしまい、本人は元気でも連れ合いを失った友人は多い。みな子たちは昨年、最終の同期会をして名残りを惜しみつつ別れた。

生きているときは
晴れやかにして
嘆くことはない
命は束の間
時は　容赦なく
終わりを刻む

みな子の女子師範卒業時、恩師から記念に贈られた色紙の言葉である。その言葉の持つ意味は、二十代、三十代はおろか、仕事をリタイアした六十代になってもなお、ハタと膝を打つほどの共感は生まれなかった。しかし、三人の子どもたちがそれぞれ成長独立し、みずからの家庭を創り、一年中顔を合わせる機会も少なくなった今、八十代になって初めてみな子はその言葉の一行、一行が心を揺るがすような大きな意味をもって迫ってくるのを感じる。

一日が終わると、ああ、また一日を生きた――と、感動する。なんの変化もないありふれた一日なのに、ただ生きられた！　と感激する。この心の躍動はいったいなんなのだろう？　まるで初々しい少女のような希望と好奇心が湧き上がる。

しかし、容赦のない時の流れに無為に漂いつつ、喜怒哀楽を忘れて自分らしさを失うことの怖ろしさ……事実、みな子はその現実をみている。そして驚き、悲しんだ。

忘れもしない。友人の見舞いで病院を訪ねたとき、かつてはクラスのリーダーだったある友人が、体中をチューブで繋がれ、自分の口で食べられず、機械によって呼吸させられ、排泄さえ他人の手が必要な状況でベッドに横たわっている姿に、思わず胸が締め付けられたことを――。

生きるということは、肉体の正常な保持とともに、精神の活発な活動、輝きなくしてありえようか！　そう納得したとき彼女は鳥肌の立つ想いで自分たちの完全な生活の確立を望み、即、そのための行動を起こさぬわけにはいかなかった。

「おい、あれ、何だと思う？」
二人で散歩中いきなり浩三が訊いた。最近自分たちの住まいの裏手の山の頂上に派手なカーキ色の塗りこみで統一された四階建ての建物を指さしている。
「もち、老人ホームじゃない？」
「しかし、あの壁はなんとも不気味だな。もっと薄いレモン色か、いっそ純白にして、シックな感じにしたほうがいいんじゃないか、あんなお化け屋敷に一緒に入るのはご免だな」
「もちろんよ、あそこに入れば、みんながみんな、認知症化するんじゃない？　だって周囲に同化するのが人間のサガだもの」
そんな対話をしていたころの夫に、みな子はひとまずの安心と信頼を抱いていた。なに

しろ、みな子がリタイア後の生活の逆転のストレスに耐えられず、うつとなり、何ヵ月も心療内科病院に入院していたころ、夫は二〇キロの道のりをほとんど毎日車を運転して、病院に通い、昼食をみな子と同じものを一緒に食べてくれたのだ。衣類の名前書きもすべてやってくれた。しかし――。

みな子の退院後、彼女が家事や外でのグループ活動に積極的に取り組み、多忙な合間を縫ってかつて専門としたピアノの練習や、読書、そしてモノ書きなどに意欲的に取り組む行動とあたかも反比例するかのように、浩三は変化していったのである。

「なに？　これ」

朝起きてトイレに行こうと廊下に出たみな子はびっくりして声を上げた。隣の浩三の寝室からトイレまでの廊下に、びしょびしょの水のあとが続いているのである。その正体がまさか夫がしくじった尿の跡だとは思いもしなかった。

「パンツの履き替え、どこ？」

と彼に訊かれて初めて、尿失禁という言葉が頭に浮かんだ。

「どうなってんの？　こんなに漏らしちゃって――」

「どうもこうもないよ。我慢できんもんはしようがない」

加齢とともに、恐らくは誰もが経験する生理現象であろう。事実、夫よりも二歳年下のみな子でさえ、若かったころの生理用の古いパンティを、念のため外出のときには着けている。でも廊下に撒き散らすような失態はしない。我慢できず、会合中にトイレに駆け込むようなこともしばしばある。みな子の場合は、大きく他人の手を煩わすような失態はほとんどない。三輪車をわりと器用に乗り回し、

「おばさん、うまいなあ、オレんとこの女房、何万円も出して買ってやったのに、一度乗ってひっくり返ったんだ。そんでもう乗らんと言いやがる」

「やはり練習がいりますよ、私だって慣れるまでに何度も転んで、毎日練習して、やっとこれだけ乗れるようになったんですから――」

「あんたはやる気があるよ、羨ましいよ」

おばさん、と呼んでくれて、みな子は機嫌よく三輪車の乗り方のコツを話した。おばあさん、と呼ばれるのは自分の孫の場合は当然なのだが、知らない人におばあさんと呼ばれたことはまだない。業者などにお母さんと呼ばれてもそう抵抗感はない。「お姉さん」と呼ばれたときは思わず最敬礼した。その日の髪型や、気にいった服がよく似合ったりした日は、うきうきしてくる。

ところが浩三は若いころからお洒落っけがまったくない。最近は特にひどい。冬の寒い日などは風呂に入るのも面倒がるし、毎日の髭剃りもやらない。加齢臭がぷんぷんする。一緒に歩くのもイヤになるときがある。そういった傾向がどんどん加速して、視力が落ち、手探りで物を取り上げたり、聴力が落ちて、みな子の呼びかけにも一度で応じられない。大切なもの、例えば金の入った財布、保険証、家の鍵などすぐ紛失してしまう。冬の手袋

など新品で厚手のものを二回とも失くしてしまった。とにかく物忘れがひどい。いまいったことをすぐ忘れる。昔のことはわりとよく覚えているが、昨日はなにを食べたかが分からない。

夜中に起き出してきて、

「いま、朝かい？」

と訊く、逆に真昼間に、

「もう夜中だろ？」

などと訊く。

「とうとうくるべきものがきましたね、確かに認知症の状態ですなあ、あなたの名前が分からなくなるのも覚悟しておかないと――」

みな子のかかりつけの心療内科のM医師がそういう。

みな子には職のリタイア後、生活リズムが百八十度転換した上、さらに長男の敏文が、大学在学中、学生運動にのめり込み、二度も蒸発してノイローゼとなり、M医師にかかり、入院してやっと病から立ち直った貴重な体験がある。それを旧厚生省や大手新聞社などの主催する「医療体験記」に応募して入賞し、東京の帝国ホテルでの表彰式に臨み、式後のレセプションで、審査委員長の故斉藤茂太氏がみな子に近付き、彼から、

「僕があなたの文章を推薦したんですよ」

とじかに言われたのが忘れられない。それをきっかけにみな子は生きる意欲が湧いてきた。次々と各種のコンテストや懸賞文に挑戦し、入選、入賞を果たしてきた。そして現在、夫と二人の自立を目指している。

夫ひとりをホームに入れるに忍びない。でき得る限りの努力をして、夫とは最期までともに生きたい。次第に覚悟は強固なものになっている。

「できるだけ彼のプライドを傷つけないように配慮して、当分たいへんでしょうが、あなたがお世話してあげるのがいいでしょうね」

みな子はかつて自殺しようかとまで悩んでいた自分の窮状を、温かく救ってくれたM医師にいまも絶大の信頼を寄せている。

浩三は衣服を前後ろに反対に着たり、裏返しに着たり、ズボンがひとりではけないまでになった。道に迷い、近所の人に連れてきてもらったこともある。が、悲しいが突き放すことはできない。半世紀以上をともに歩んできた夫婦なのである。

みな子は自分たちの最期をいかに演出するかを、いよいよ具体的に考えるときが意外と早くきたことを実感せざるを得ない。それにつけても思い出すのは、数年前のこの地区での出来事である。かつてみな子の職場で同僚として日々をともにしたYというある理科の男性教諭が、八十三歳で死去した。夫人もみな子の女学校の先輩で、バレーボール部で活躍していた逞しい体つきの人だった。このあたりでは珍しいことにその家では、二人の男のお子さんと近い血縁者だけで野辺の送りともいえるもので済まされた。それについては、

田舎人たちの間で「変わったことをする、地区の伝統に従わない」という非難が飛び交ったという。しかし、みな子はむしろ、理想的な形だと思ったし、夫人の決断力に感心した。ビジネスとしての葬儀社もたくさんできた現在、いざ告別式となる、近所の人たちのサポートも大がかりな形がとられ、職場を休んで終日かかって行われるのが習慣であった。葬儀のたびにはなにがしかの香典も必要となる。それは体力的にも精神的にも経済的にもたいへんだ、という気持ちがスリムな葬儀の形に結びついたのだ、とみな子は解釈している。ところが現在まで、古い習慣を合理的に改正しようとする動きがこれまで全くみられなかった。新聞で取り上げられるような高名な方でも、一応近親者での密葬の後、改めて「お別れ会」なるものを実施している。そうなると、葬儀よりももっと多額の金額が入用だったかもしれない。地位や金の多寡にかかわらず、人の死はいずれも尊厳なものであるが、古い習慣に捕らわれず、合理化して他人に迷惑をかけない、ということを果敢に実行したＹ家のやり方にみな子は賛辞を送りたい。自分たちの葬儀についてのよい参考例と受け止めた。

みな子はこれまで近親者の臨終に立ち会ったことが、厳密にいえば一度しかない。それは実母リツの場合である。

昭和三十五年（１９６０）四月九日。

「実家からお電話よ」

と告げられたのは、翌日の入学式のための式場準備で体育館にいるときだった。実家からと聞いてすぐピンときた。

リツは前年の夏ごろから体調を崩し、夏休みを利用して見舞いに行くと、座敷の外の籐椅子に仰向けに寝ている。

「具合はどう？」

「腰が痛うてなあ……」

と、腰のあたりをさすり、顔色が悪い。

「食欲はあるの？」

「そんなもん、ないよ」

これは尋常ではない、とみな子は直感した。もともと痩せぎすで肉の薄い体つきのリツは、ますます痩せていた。

「この夏は異常な暑さだから、疲れが溜まっとるんよ」

おざなりだと分かっていても、そんな言葉しか言えなかった。県の一級河川の最下流の海に近いあたりのこの村からは、病院へ行くのにも何十キロとかかる。大半の病人は家庭で医師の往診に頼ることになる。なにしろ昭和三十年代の日本の田舎では、病院に入院できる住民は少なかった。家庭で療養し、往診に頼り、家庭でそのまま臨終を迎えるという形がほとんどだった。

「腰が痛いのだったら、私たちの町に評判のいい鍼灸師がおるんよ。大勢の人がそこで治ったって……」

「そう……じゃあ、お前が連れていってくれるかい？」
「いいよ、自転車の後ろに乗せてあげる」
みな子は妊娠していたが、悪阻も終わり、体力はあった。三十代前半で若かった。リツを自転車の後部座席に乗せ、五キロの道を懸命に漕いでその鍼灸師に連れていった。若い男の鍼灸師は、リツの華奢な体に馬乗りになって、力いっぱい揉みほぐした。みな子ははらはらして見るに堪えられず、中止してもらい、すぐに母親を連れ帰った。リツにとって強硬な揉みかたはあまりにも痛々しかった。それが却って彼女の体調を悪化させたらしく、みな子は後悔したがあとの祭り。それ以来リツは寝たきりとなった。そのまま秋が過ぎ、冬を迎えたころ、平生はたびたび看病にも行かれず、看護は専ら祖父母や妹に任せきりとなっていたのだが、年が明けた昭和三十五年の冬休みに久し振りに行ってみて驚いた。部屋に敷かれた布団の中の母は食事さえ摂れず、往診の町医者によれば、貧血が酷くて毎日往診して増血剤を注射してもらっているという。みな子は胸騒ぎがした。夫に頼んで上司と懇意な隣町の病院長の往診を頼んだが、手遅れだった。リツはみな子の問いかけにもまともには応じられず、黙って頷くだけの力しかなかった。
しかし、リツは厳しい冬をどうにか乗り切った。みな子は妊娠七ヵ月となっていた。なんとか出産して男児の孫の顔を見せたい。と思っても男児と断定もできない。心を残しつつ職場と二人の姉妹の子育てに追われていた。
そして四月九日。桜の蕾が膨らみ、庭の桃の花が満開となり馥郁と香る日、リツは家族たちに看取られながら、五十六年の短い生涯を閉じたのである。外はうららうらと陽炎が萌え、森羅万象生命の躍動へと始動しようとするとき、ひとりの命がひっそりと終焉を告げる。このコントラストは、切々とみな子の胸に迫った。そしていま、自分のおなかの中には、リツに中絶を強く止められた、男児か女児かいずれとも知れないひとつの新しい命の活発な胎動がある。
せめて遺体の清拭を、長女の自分がやりたいと思った。袖をまくり上げて手を清め、そろそろとリツの寝巻きを脱がせていった。なんという体の衰えようだったことか。床擦れのした体は骨と皮のみとなり、もはや動かぬ物体と成り果てていた。
みな子は右手を母の肛門から体内へと差し込んだ。真っ黒な内臓の塊が、腐臭を放ちつつ、どろどろと流れでた。思わずハンカチで口を覆い、さらに奥深く腕まで挿入して、黒い塊をすべてかき出した。これは、父亡きあとの長女の自分に絶大の信頼をよせていたリツを、自分のわがままで裏切ったことへの慙愧と悔恨の行動であった。改めて人の死の残酷さを目のあたりにして、みな子は胸を締め付けられた。
父はみな子が小学六年生（十一歳）の秋、外国航路の船員時代、中国はアモイの沖の仮停泊海上で突然の脳溢血で即死している。享年四十四。まさに男盛り、働き盛りであった。だから遺体も死に顔もみていない。年間がほとんど海上か外国の港。家族全員そろった団欒の楽しさをみな子は知らない。現地南京で荼毘に付された遺骨が、数ヵ月後に還ってきただけだった。

貧しい農民から奮起して船乗りへの道を志し、一級ずつ厳しい試験をクリアして一等運転士（当時の呼び方）いわゆるチーフオフィサーとして、船長試験にも合格し、辞令を受けた直後であった。そのとき母リツは三十六歳。たったひとりの妹は生後一年で小児麻痺に罹り、幸いに一命は取りとめたものの、右足に後遺症が残り、一級障害者となった。このダブルパンチでリツはうつ病となり、長女のみな子を唯一の頼りとしていたのである。

しかし、みな子は父親似で女としてはすべてに大胆不敵、猪突猛進型として成長した。自分の夢に熱中し、学校からも社会人となってからも帰宅が遅く、夜の道を平気で自転車を飛ばすような、恐いもの知らずの女なので、リツの心配は増すばかりだった。

そんな両親の最期をみていて、死に様としては苦しまずに死んだ父の即死のほうがよかったのではないか、母はあまりにも苦労性で、たくましさ、したたかさがなかったように思われる。そのような両親の早い死を受け止め、自分がそのぶん長生きしたい、志半ばで斃れざるを得なかった父親の無念がよく分かる――がゆえに、自分の死はまっとうされた死の形でありたい。夭折は避けたい。なるべく長く命を保ち、肉体のみで精神の伴わない死であってはならない。息を引き取るぎりぎりまで精神が輝いていたい。無駄な経費も使いたくはない。その点ではＹ家の方法が理想的だと思う。高名ではないのだから「お別れ会」などはいらない。少数の人間で静かに遺体の始末さえしてくれればいい。

ところが思わぬ夫浩三の病変で、みな子の目指す夫婦二人そろっての最期は不可能になりそうだ。

人の死のあり方、周囲の対応のあり方、いずれも古い過去からの習慣に捉われない、斬新、かつ合理性を核とした人間の終末期対策を、ひとりひとりが真剣に考え、取り組む必要がある、とみな子は思う。

浩三の病状は緩やかに進行し、尿失禁に加えて下剤の飲みすぎで、出がけに大便を漏らし、パンツいっぱいに溜まった褐色の便をもってウロウロする。聴力も視力も低下し、食卓にある料理を箸やスプーンでうまくつかめない。つついているうちに卓から落としたり、引っくり返したりする。みな子が手を添えないと困るまでになった。

道を忘れるので、一人で外出させられない。昨日行ったところをきょうはもう忘れている。物もよく紛失する。冬になり厚手の手袋を買って与えたのに、一日履いてすぐ翌日は失くし、一緒に探してもみつからないことが二回あった。耳も遠いので、みな子が一回呼んだくらいでは聞こえない。声を大きくして二度呼ぶと、大声はよけい聞こえない、と怒る。感情の起伏が激しくなった。結婚前、穏やかでシャイなところに好意を持って一緒になったのだが、感情を爆発させて怒鳴り散らす夫をみていると、老化による人格の変化に驚き、悲しくなる。しかし夫はみな子の存在を唯一頼れるものとして、そばを離れようとはしない。二歳年下とはいえ、テキパキとなんでも処理できるみな子との会話が成り立たなくなりつつある。二、三歳の幼児くらいのつもりで会話を交わす。

ただ、浩三は食欲が旺盛で、なんでも食べることができる。歯が悪く、入れ歯に馴染め

ず柔かいもの、小さく刻んだものしか食べられないから、ひどく時間がかかる。
かつてみな子などは、戦争末期の女学校で、英語は敵性語だとして授業は二年からカットされていたが、浩三は県立一中の出身で秀才が多く、友人たちの多くは卒業後弁護士や医者になっている。浩三も若いころは英語で寝言をいったりして、みな子を驚かせたりしたものだが、いまはすっかり忘れて、みな子がときどき単語を訊いてもさっぱり覚えていない。
「どうなってんの？　あなた、こんな単語も忘れたの、県立一中のエリートじゃなかったん？」
と、つい言って大声で怒りだされた。彼のプライドは病む身となっても確固としていて一番してはいけないことをしてしまったことを彼女は悔いた。この連れ添いと理想的な自立を目指すには、相当の苦労を覚悟しなければならないだろう。行けるところまでは行きたい。老人ホームなどに入れたら、周囲が同じ程度の認知症の人ばかりで同化の原則が働いて悪化しないともかぎらない、なるべくみな子と一緒に暮らして、外へ出て外部の普通の人たちとのコミュニケーションを図らなければ――と思うのだった。

「どこ入ってんの！　ここは女が入っちゃダメじゃないのっ！　あっちの部屋でなきゃダメっ！」
二人はリタイア後、そろって隣地区の家から五キロ近くもあるスポーツジムに通い、運動してきたが、クルマの免許を返納後は、夫は自転車、みな子は三輪車でしばらく通っていた。
浩三は、新卒として職場に入った直後、大病を患い、医師にも見捨てられるまでになったことがある。盛夏のころだった。心配した上司と同僚が自宅にやってきて、玄関から衝立越しにみた病人のあまりのやつれように驚いて、ある女教師は嘔吐を催し、あわてて外に走り出て吐いたことがある。浩三の顔は土気色となり体は骨と皮ばかりになっていたのである。見かねた上司が母親に勧めたのが、自分の専門である保健体育で全校児童の給食に取り入れている「青汁」の飲用であった。藁にもすがる思いで、家族総出で真夏の山野に行き、新鮮な野草を捜した。松の葉までもぎ取り自宅で細かく刻んだ。ミキサーなどない時代のこと、擂り鉢の中に入れてすり、どろどろにしたものを清潔な布巾でしぼり、液体状の青汁にして病人の口へあてがうと、ゴクリ、と喉をとおった。それからは毎日青汁で命を繋いだ。本人も二十三歳とまだ若く、初秋を迎えることには病床をあげ、二学期から出勤を始めるまでに回復したのである。
もちろん大事をとって午前中だけで帰宅の日々がしばらく続いた。彼は改めてあわや死にかけた貴重な体験から、自身の肉体鍛錬法を研究し、ジョギング、ウォーキング、水泳とレパートリーを増やし、六十歳で定年後も地区のスポーツジムに通いとおしてきた。みな子も触発され、青汁党となり効果として皮膚のおできがまったく消え、肌もすべすべとなり便秘もなく、快適に暮らしてきた。

やがて浩三が現在の状態となっても、医師は水泳などの運動を勧めた。最近近くのスポーツジムに入り、入会金を払って運動に取り組みはじめた二日後のことだった。掃除係りの若い女性から大声で怒鳴られたのだ。男女別の更衣室があることは知っていたが、みな子が着替えて待っていても夫がなかなかでてこない。最近の浩三の行動を気にしていたので、まさかと思い、つい男子用のロッカールームを覗くと、彼はロッカーの鍵の開け方が分からないらしく、扉の前にぼーっと立っている。おやおやとついそばに行き、あたりに誰も裸の男性のいないことを確かめて扉を開け、服を脱がそうとした。そこをまるで泥棒のように咎められ、つい売り言葉に買い言葉、

「あっちの部屋ってどこ？　そんなことなにも聞いてないわよっ！」

自分でもおかしいくらい大声を投げつけていた。

その日、二人は若いインストラクターと上司の支配人に呼ばれた。どうやら浩三はみな子の行かないプールや風呂場まで行き、そこで他人の乱れ籠の中からシャツなどを引っ張り出していたらしい。

「みんな怒っているんですよ、あの人はケガをするかもって……」

やっぱり――みな子は言葉もなかった。もうどこにも浩三を受け入れてくれるところはない。若かったころのスポーツマンの姿はとっくに消え失せてしまった――。

「いやあ、すみませんなあ、しかし、まだ上の者がいますので、いずれよく相談して結果はまたお電話いたします」

帰宅し、淡い期待を抱いて待っていたが、ずっとナシのつぶて。夫は完全にボイコットされた。

みな子はB社の発行する総合月刊誌をずっと定期購読しているが、なかなか得るものが多い。最近の号に出ている記事のうち、「わが人生最良の瞬間（とき）」という特集記事は、どの著名人のものも考えさせられ、興味深かった。その中に俳優M・R氏の一文があった。

――自分の死に様を撮って宗教観を世に問おうと、（中略）アフガニスタンまで撮影に行きました。ラストシーンは私の肉体が無数の鳥たちに啄まれる「鳥葬」を撮ろうと、カラコムル山脈に向かったのです。（中略）そこで僕自身を問う「最後の一本」を完成させ、いささかでも共感を呼ぶことができたら、それが「最良の日」になるのかもしれません。――

（抜粋）を読み、みな子は興奮した。

――付けた衣類の外から、あちこち何者かが自分の体に当たり、疲労のたまった頭脳はもうろうとしていて、眠気と覚醒の中間にあり、衣服の外から肉体に当たる何者かを、確かめることができない。しばらく当たる気配がなく、眠気が襲いはじめると、また今度はさっきより強く当たる。ようやく目が醒めたみな子の衣類は、あちこちボロボロに食いちぎられ、頸から下まで裸の肉体の皮膚まで無残に剥ぎ取られている。深く浅く肉体に食い込んだ何者かによる多量の傷からは、赤い血が流れ、足まで伝っている。顔もじんじんと

痛み、目や鼻、唇、耳たぶあらゆる器官から鮮血が噴き出し、痛みが激しい――。
ここは？　いったいどこなのか。あたりを見回すと誰もいない。どうやら高い山の頂上らしい。こんなところまで独りで登った覚えがない。持っていたはずのリュックもなくなっているので、入れてきた救急用品、薬、食糧などなにもない。激しい渇きを癒す水一滴もない。ああ……みな子は大きな絶望感に襲われ、その場に蹲った。体中から力が吸い取られていく――。
もう死ぬ……しかし、不思議なことに、全身の痛みに苦しんでいる自分の他にもう一人の自分がいて、高いところから、無数の鳥たちに裸の自分の肉体が啄まれている凄惨な情景をみているのだ。腹から脳から血まみれの臓腑が嘴によってつつき出され、鳥たちの食欲を満たしている。みるもおどろおどろしい光景だ――。
「ギャアッ！――」
思わず絶叫した。
「どうしたんだ？　悪い夢にでもうなされたか」
浩三がドアを開け、覗き込んでいる。意外と普通の夫の声なのだ。そんなはずはない。次第に醒めていく意識の中で、みな子は、これのほうが夢なのか、否、現実なのか？　もはやさっぱり分からなくなった――。

―了―